巻頭言

本年度から新規科目として「文学と美術」を担当することになり、シラバスの一項目に「人見東明とヒュウザン会」を掲げている。ヒュウザン会（フュウザン会とも表記する）とは、大正元年（一九一二）に斎藤与里、岸田劉生らが発起、これに萬鉄五郎、高村光太郎、木村荘八らが加入し、銀座の読売新聞社三階を会場とする展覧会を開いて、後期印象派やフォーヴィズムの影響を鮮明に表現した青年画家の集団である。文展（文部省美術展覧会・明治四十年発足）の官製アカデミズムに対する批判の口火を切った活動として、近代美術史上に名を残す。

平成十六年に光葉博物館で「人見東明とフュウザン会絵画運動」展があった。この時の図録や、北川太一氏の『ヒュウザン会前後』（文治堂書店、平成二七・四）などをもとに教材研究を進めているのだが、講義の眼目は、当時数え三十歳で、読売新聞に在籍していた人見東明（本学創立者）が、若い画家たちに支援を惜しまなかった、その芸術への心の傾けかたである。

夏目漱石は大正元年の十月二十六日、津田青楓と連立って上野公園の文展を観た帰り、ヒュウザン会の会場へ赴き、展示品の中から高村光太郎の絵を一枚購入したことが判っているが、人見東明とヒュウザン会会員との距離は、漱石よりもよほど近かった。

発起者のうち、斎藤与里とは第一詩集『夜の舞踏』（扶桑社書店、明治四四・六）に「本集を出版するに当り口絵其他の絵画数葉を寄せられたる斎藤与里氏の厚意を謝す」（例言）と記すほどの仲であったし、本間久雄氏（「人としての東明氏」『人見東明全集』第一巻、昭和五四・一〇）は、創立者の自宅で岸田劉生描く八号大の「人見東明像」を見たことがあったという。「劉生の慣用したヤニ色」（本間氏）の肖像の所在が不明なのはまことに遺憾ながら、両者の交流を証するものにちがいない。新進画家の展覧会の会場が読売新聞社の楼上であったという異例も、また同紙のヒュウザン会に関する批評紹介記事の詳しさにも、おそらく東明の強い推進力が機動していたとみるべきだろう。そこにあるのは、芸術運動の渦中に身を置く一人の文学者の姿だ。

本学園は、創立者が文学から教育へと身を転じたことによって始まったとされる。しかしこの理解では、第二次大戦後の混乱期、人々が生活を立て直すのに忙しい時、文芸書、雑誌の蒐集を始めて、今に残る貴重なコレクションとなった「近代文庫」や、この資料に基づく『近代文学研究叢書』（昭和三十三年・第六回菊池寛賞受賞）の文化的業績――そしてそれらが昭和女子大学の社会的認知に与って最も力のあった事実――を説明することができない。やはり創立者は、みずからが心を砕いた「文学」と「芸術」の恵みを教育の中心に据えていたと考えるほかないのである。人見東明は「詩」を書く「場」を変えたのであって、「詩」そのものを棄てたのではなかったことになろう。

「襟を正す」という言葉があるが、創立百周年を四年後に控えたいま、私は「人見東明とヒュウザン会」を手がかりに、創立者の生きていた時代に立ち戻り、当時の言動の内実を確認し、もってその素志につながりたいと願っている。新しい道を拓くためにこそ「伝統」があり、開学の原点があると考えるからだ。

（吉田昌志）